



いつも友だちと一緒に — 学力テスト合間の休み時間 (1月6日 3の3)

どのような仕組みになっているのだろう。ふとした拍子に記憶の抽斗(ひきたし)が開くことがあります。先日も中学時代の一場面が鮮明によみがえりました。

部活動の場面でした。結果的に最後の試合となった地区大会の決勝。その試合風景ではなく、帰途につき電車を待っていた時の様子です。試合に負け言葉少ない部の仲間たち。そんな私たちに発した顧問教師の言葉—「いい試合だった」

50年も前のことなのに、その時の1人1人の様子が名前とともに頭に浮かびました。

卒業文集の担当をしています。冬休み明けに出された生徒全員分の原稿に眼を通しました。

中学3年間の思い出を限られた字数の中で書き表すのは大変な作業です。550字では伝えきれないことや表しきれないことの方がはるかに多いはず。それにもかかわらず、生徒は原稿用紙の升目を、その人しか書けない言葉で埋めていました。

言葉で残せるもの、思い出や記憶として残るもの。それぞれが相まって中学時代のかげがえのない宝物となっていくのでしょう。

卒業文集②

熱 源

秋から冬にかけて二度読み返した本があります。

『熱源』(ねつげん)です。

明治維新後の樺太を舞台にした歴史小説で、アイヌの主人公を軸に、彼を取り巻く様々な人々の関わりが、史実をもとに描かれた大作です。

小説の中で際立つのが「寒さ」と「熱」です。

「寒さ」は、文字通り気温を指すと共に、生きる意味や目的のなさを象徴的に示しているかのようです。そのような中で、人は何から生きる意味を感じ歩き続けているのか。その象徴として「熱」が示され、熱源はどの場面でも人でした。

本に描かれた世界を、体験することはできません。しかし、触発され、自分の過去やこれからの生き方を夢想することは可能です。

教師として残り10年を残す頃出会ったのが、震災直後に担任した生徒たちでした。私は学区外から入学する生徒を担当しました。入学式後も転入する生徒が続きます。以前勤めた双葉郡の中学校の制服を着ている生徒を見つめながら、強く感じたことがあります。私は双葉町出身です。「双葉郡で教職を共にした友人たちは、今故郷を離れ県内に散っている。彼らが担任するはずだった生徒を私が預かり、教師としてできる限りのことをしていこう。」

教師として年を重ね、担任する機会が少なくなっていた私に、生徒達は「熱」を与えてくれました。そのかけがえのない1年の経験を通して、残された教職を全うできるという確信ができたように思います。

2年前に定年を迎えた私は、縁あって今好間中学校で教員を続けています。

昨年、私の心に熱を与えてくれた出来事がありました。

コロナ感染防止のため緊急事態宣言が発令され、4月中旬から臨時休校となっていました。ある日、3階美術室のベランダから校庭を見ると、東端の方でうずくまっている人がいます。何だろうとよく見ると、1人で伸び放題の草をとっているのです。広い校庭です。強い日差しの下で、時間も範囲も限られるでしょう。それでも自分の責任を果たそうと寡黙に取り組んでいます。この年齢になっても、なお、その教師の姿勢から強く教えられることがありました。その日を境に自分の仕事に取り組む姿勢が変わったように感じます。

私は、これまで多くの人から「熱」をもらい、人生を歩んできました。

自問します。「私は誰かの『熱源』になれたのだろうか。」

その答えを知る術はないことは分かっているのですが…。

3年生の皆さん、卒業おめでとうございます。

多くの人との出会いが、あなたの世界を広げ豊かにしてくれます。

「熱」を感じるあなたでいてください。

あなたはきっとだれかの「熱源」にもなれているはずです。

